

草津市立矢倉小学校通信 令和3年6月1日 NO.4



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

相手の身になり、よいところを見つけ、認め、伸ばすようにして

『ちゃんとしいや』って何回言っても聞いてくれはらへん。しまい、たたいてきはる。」

悔し涙をこらえながら訴えてくるその向こう側に、半分ふてくされてこちらをにらんでいる子がいた。私としては背景がにわかにつかめなため、双方の言い分を丁寧に聞き取ることにした。そして互いの言い分を翻訳し、伝え直す中で、たたいてしまったことはよくないこと、たたかずにいられなかった思いを理解してみることを、それぞれに促し、その場は収まった。

話がうまく聞けない子だとか、約束事が守れない子だとか言われ、つい手が出てしまいがちになる子がいる。これは、話すことや読むこと、やりとりすることといったことのバランスがとれていないことに起因しているとのこと。早いうちに周りの大人が気づけば、それなりのかかわりをしていくことでうまくやっていけるようになるという。

こうしたことにかかわって、過日、すてきな話を聞くことができた。読んだり、書いたりすること、話し合うことなどが苦手だという、そんな子どもたちが学ぶ教室が、市内の小学校5校、中学校2校にある。小中学生だけでなく、就学前の子どもたちも通える「ことばの教室」「通級指導教室」である。その運営について協議する会合に出席させてもらったときの話である。

…わたしたちは子どもを見るときの見方を変えました。これまでは、点検項目のようなものを用意して、できていないところやダメなところを見つけるようにしていました。これができない、これもダメなどとチェックしていくわけです。これを整理し、力を入れて指導する領域を定めていました。この方法だと気にしていきたいことは確かに見えてきます。けれど、その子のよさや望ましいかかわり方はあまり見えてきません。ですから、今は、できていること、できるようになったことを見ていくようにしたので…

確かにそうだ。私の経験上、何かできることはないかと調べるだけでは解決につながらない。できないことを指導する側、指導される側というようになればなるほど居心地は悪くなっていく。できないことをやみくもに繰り返させてしまいがちになってしまい、それは、ちょうど機械や設備の安全点検をするように、子どもを扱ってしまうからだ。人間は機械では決してない。修理するような感覚で、子どもとかかわることは、信頼関係を土台にする教育の世界では、逆効果をもたらす。とりわけ、極端に苦手意識をもっている子どもの場合、できるようになるかどうかとは別のところで、自分を守るために他者との関係に敏感になっている。だからこそ、相手の身になって、よいところを見つけ、認めて、伸ばすようにしていきたいもの…。話を聞かせてもらいながら、確かにそうだと受けとめていた。

可能性を拓いていくのが教育であり、互いのあり方、生き方を問うていくのが教育の出発点であり、終着点である。どうかすると鬱屈した気分になりがちなところに、ふうわりとあたたかな風を呼び込んでいただいた話だった。

校長 大林道範